

アメリカ人日本語学習者の合意形成談話における「かな」の使用  
 The Use of "Kana" among American Learner of Japanese  
 in a Consensus-Building Discourse

久保亜希, 東京国際大学  
 Aki Kubo, Tokyo International University

## 1. はじめに

私たちが日々の生活の中で頻繁に遭遇する談話の一つに、会話参加者が意見を述べ合い、調整し、最終的に一つの結論を導き出す談話（以下、合意形成談話）が挙げられる。合意形成談話では、相手と意見が異なる場合は不同意を表明する必要があることもあるが、不同意表明は相手のフェイスを傷つける可能性があり、どのように意見を述べるのか配慮をする必要がある。また、意見を一致させる必要がある場合は、相手の意見に対してどのように案を提示するのか、その調整にも気を配らなければならない。円滑な人間関係を構築するためには重要、かつ困難な談話であるといえる。

しかしながら、合意形成談話をはじめとする議論の談話では、アメリカ人は対立を表明する傾向がある一方、日本人は対立を回避する傾向があることが報告されており、日米で相違があることがわかっている（Wanatabe, 1993; 久米他, 2000）。母語の規範が学習者の談話に影響する場合、英語を母語とするアメリカ人日本語学習者は日本語母語話者とは異なる特徴が見られる可能性がある。学習者に適切な指導をするためには、その特徴を明らかにする必要があるだろう。

フェイスを侵害する可能性がある合意形成談話では、いかに自分の意見を緩和させるかが重要となる。そのためにはさまざまな表現が使用されるが、特に、不同意を間接的に示したり、疑念を示したりする終助詞「かな」は重要な表現ではないかと考えられる。

そこで、本研究では、日本語学習者が合意形成談話でどのように意見を述べるのか、「かな」に着目し、分析することとする。

## 2. 先行研究

### 2.1 母語話者の合意形成談話の特徴

多くの先行研究では、日本語母語話者は不同意を表明することが報告されている。たとえば、反対意見の表明方法に注目した梶本（2000）は、相手の提案に対してすぐに否定的な立場を示す「目的達成」型と、意見の対立を示さない「対人関係配慮」型の2つの指向性があるとしている。後者の指向性を示す手段の一つに意見をぼかすため表現として「かなあと思って」「んじゃないかなあ」が挙げられており、相手のフェイスを侵害しないようにすることができるとしている。また、合意形成談話の中での対立緩和の方略に着目した高宮（2008）は、否定疑問文を用いて対立意見を柔らかく提示して説得をしようと試みる様子や、「かな」「ような」などの緩和表現を用いて補足説明を行い、意見をまとめる様子が観察された。

このように、意見を緩和させるための方略は多々あるが、その中の一つに「かな」があることがわかっている。終助詞「かな」は、異なる主張の表明を行う際や、相手に同意できない場合に発話内容を和らげたりする際に用いられるという特徴も持つ（平山, 2015）。また、「かな」は基本的には疑いを表す表現だとされるが、対話で上昇調に提示されると応答を強制しない質問になるという特徴もある（安達, 2002）とされる。相手に配慮しつつ意見を求めることができる発話であるため、合意形成談話にとって重要な表現であると言える。

## 2.2 学習者の合意形成談話の特徴

学習者の合意形成談話を対象とした研究は、不同意表明に注目したものが多い。例えば、堀田・吉本（2013）は、中国語を母語とする日本語学習者は、明示的に論理的に意見を述べること、日本語母語話者よりも「ヘッジ付き意見（「だろう」、「でしょう」、否定疑問文、言いさし文など）」の使用が少なく、種類も母語話者ほど豊富ではないと指摘している。「かな」もまた、同じく中国語を母語とする日本語学習者を対象とした倉田・楊（2010）においても、日本語母語話者は対人関係に配慮しながら意見を述べる一方、学習者は否定的発話や否定理由不同意表明におけるモダリティ表現に注目した楊（2014）は、学習者は日本語母語話者のようにモダリティ表現を使用しないことを指摘し、不同意をためらわずに表現しているような印象を与えているとしている。特に、文末に認識のモダリティを置くことが困難だと報告している。「かな」は、認識のモダリティであるため、学習者には使用が難しい可能性が考えられる。

しかしながら、中国語を母語とする日本語学習者のヘッジ表現を抽出した堀田（2020）は、日本語母語話者よりヘッジ使用の総数は少なかったものの、最も多く産出された表現の一つとして「かな」を挙げており、学習者はある程度の試湯が可能ではないかと考えられる。

## 2.3 先行研究のまとめと本研究の目的

以上の先行研究から、学習者は母語話者と比較すると直接的に意見表明を行う傾向があることが言える。これは、問題点の指摘や否定的な発話をするなど、発話内容がひとつの要因だが、ヘッジやモダリティ表現などの使用も大きく影響することがわかっている。その中でも「かな」は堀田（2020）によると、比較的産出されやすい表現であるようだが、合意形成談話においては、実際に学習者はどのように使用しているのだろうか。

先行研究の多くは、中国語母語話者を対象とした研究だが、英語母語話者を対象とした伊藤（2017）においても、習熟度が高い学習者は母語の規範に従うためか、対立を示す傾向があることを報告している。ただし、伊藤（2017）は学習者同士の談話を分析対象としているため、あえて母語の規範に従って対立を明示した可能性が考えられる。不同意を緩和させる機能を持つ「かな」の使用を観察するためには、母語話者との接触場面を対象とすべきであろう。

したがって、本研究では、接触場面での合意形成場面において、英語を母語とするアメリカ人日本語学習者が「かな」を用いながらどのように意見を述べるのかを明らかにすることを目的とする。

### 3. 調査概要

#### 3.1 調査参加者

調査は、英語を母語とするアメリカ人中上級日本語学習者と、日本語母語話者とのペア9組を対象に行った。学習者のうち1名が日系人で幼少の頃から日本語に触れており、そのほかの学習者とは特徴が異なると判断したため、分析の対象外とした。学習者は、日本語母語話者と同じ大学に所属する短期留学プログラムの学生で、来日歴は平均約5ヶ月、日本語の平均学習年数は約4.8年であった。なお、学習者の日本語能力を測定するためにSPOT web版を使用したところ、平均点は71.6点であった。

#### 3.2 タスク

合意形成談話を引き出すために、本研究では「チャリティーイベントの計画を立てる」というタスクを用いた。このタスクでは、決めなければならない事柄として「イベントの内容」「日時」「場所」「参加者の集め方」「参加費の集め方」「寄付金の有無」の6項目を提示した。話し合いが始めやすいように、「イベントの内容」の例として、「チャリティーイベント」「スポーツ大会」「お菓子を焼いて売る」「Tシャツを作って売る」という案をあらかじめ提示した。

話し合いで決定した内容はタスクシートに記入するように指示し、タスク実施中の会話は録画・録音した。タスク実施に有した時間は約25分で、全てのペアにおいてタスクを完遂させることができていた。

#### 3.3 分析方法

分析では、まず「かな」が含まれる意見述べの発話（提案やそれに対する評価）を抽出した。その際、意見要求や情報要求などの発話や、場所や知識などに関する情報提供、また、タスク自体のやり方など、議論に直接関係がない発話は分析から除外した。

次に、抽出した発話を「具体案の提示」、直前の発話に対する「肯定的評価（同意、案の利点の説明、案の詳細化など）」、「否定的評価（反対意見、問題点の提示など）」という3つに分類した。さらに、これらの「かな」がやりとりの中でどのように使用されているのか、詳細に観察を行った。

## 4. 分析結果

### 4.1 「かな」の産出数

意見述べの際に使用されている「かな」を抽出したところ、日本母語話者は60回、学習者は52回観察され、総数に大きな相違は見られなかった。抽出した「かな」を発話内容で分類した結果、母語話者は「否定的評価」が最も多く23回（43%）、続いて「肯定的評価」が16回（30%）、「具体案の提示」が14回（27%）であった。一方、学習者は「具体案の提示」が33回（55%）と最も多

く、続いて「否定的評価」が 14 回 (23%)、「肯定的評価」が 13 回 (22%) と、傾向に相違が見られた。

表 1 「かな」の産出数と分類

	具体案の提示	肯定的評価	否定的評価	合計
母語話者	14 (27%)	16 (30%)	23 (43%)	60 (100%)
学習者	33 (55%)	13 (22%)	14 (23%)	52 (100%)

#### 4.2 母語話者の「かな」

次に、これらの「かな」がどのように使用されているのか、やりとりを観察した。まず、日本語母話者に一番多く見られた否定的評価に付与された「かな」に注目する。

会話例 1 日本語母語話者の「かな」(1)

01	NNS-1: ん::? あインドアなら,
02	NS-1: うん
03	NNS-1: あの¥カレー[と¥か?
04	NS-1: [あ, カレーあるか.=
05	NNS-1: =ん::[:
06	NS-1: [.hhhhh (.) 食べるかな, 暑いかな, カ[レー
07	NNS-1: [ん:::, そうですね:
08	NS-1: この時期.

会話例 1 では、さまざまな国の料理を売るというイベントの中で、どの国からどのような料理を提供するのかという話し合いをしている。まず、NNS-1 が「カレー」という案を提示している (1・3 行目)。NS-1 は NNS-1 の提案内容を繰り返し、「あるか」と可能性の一つとして受け入れられることを表明しているが、積極的には同意は示していない (4 行目)。そして、NNS-1 が挙げた案の問題点を「食べるかな」「暑いかな」と 2 つ並べ立てて提示し、相手の意見に同意できない理由を提示し、否定的評価をしている (6 行目)。この際、一度息を吸い、若干の間を置いて発話していることから、同意を遅延させ相手に配慮しながら反対意見を述べようとしていることが窺える。さらに、発話末尾に「かな」を付与し、相手に疑問を投げかけるように不同意を表明することで対立の明示化を避けようとしているように読み取れる。このように、母語話者は「かな」を相手の意見に対する否定的な評価を和らげるために使用する様子が観察された。

次に、母語話者が具体案の提示をする際に使用した「かな」の例をあげる。

会話例 2 母語話者の「かな」(2)

01	NS-4: バンドは::
02	NNS-4: 千円?
03	NS-4: 千円. (2) <千円>,
04	NNS-4: 一人当たり千円?, あるい[はバンド, 全員,
05	NS-4: [いや, (.) バン- 全員で考えよう.

---

((中略))

- 09 NS-4: 千円か二千円か, (.) 三千円 h か h  
 10 NNS-4: ん::[:に::千円はいいと[思う  
 11 NS-4: [ぐらいかな. [二千円.  
 12 NNS-4: はい, 二千円[にしよう.  
 13 NS-4: [じゃあバンドで, 二千円にしよう.
- 

この会話では、音楽イベントの参加費の値段設定について、話し合いがされている。NNS-4 が「千円」という案を上昇調で相手の反応を伺うように提示している（2 行目）。NS-4 は相手の意見に対してすぐに賛成や反対の立場を示さず、相手の発話を繰り返している。さらに 2 秒程度の沈黙、「<千円>」と発話スピードを弱めながら述べている様子から、何かを考え込んでいるようである（3 行目）。この値段設定は一人当たりなのか、1 グループあたりなのかの確認を行った後（4-5 行目、中略部分）、NS-4 は、NNS-4 が最初に挙げた「千円」と並べて「二千円」「三千円」という新たな案を挙げている。新たな案はどちらも NS-4 が提示した「千円」という値段設定よりも高額であることから、NS-4 は「千円」は安いと考えていると思われるが、他の意見を挙げることで相手に同意できない立場を間接的に示そうとしている。その選択肢を挙げた後、「かな」を発話末尾に付与することで意見を弱めようと、また相手から同意が得られない可能性も考慮して断定的な意見述べを避けようとしている可能性が考えられる（11 行目）。最後に、母語話者の肯定的な評価の「かな」の例を挙げる。

### 会話例 3 母語話者の「かな」(3)

---

- 01 NNS-3: あ::でも, その費用があつたら多分そ- スポーツたい- か::いい,  
 02 のようなイベントの方が, (.) いいんじゃない?  
 03 NS-3: え, じゃあスポーツ大会だったら::  
 04 NNS-3: うん  
 05 NS-3: どうやって::, (.) あ, えその, チャリティーの収入源を参加費  
 06 から取るってこと?  
 07 NNS-3: ん::↓:::  
 08 NS-3: (.) そういうことか. ん::それもひとつ, あり° かな°
- 

この会話では、チャリティーイベントでスポーツ大会を行うことの是非について話し合われている。この直前に、チャリティーイベントで参加費を徴収することを前提にすることが話し合われており、NS-3 はその前提であればスポーツ大会を行うのが良いのではないかという意見を述べている（1-2 行目）。NS-3 は、すぐにはチャリティーとの関連をイメージできないようだったが、参加費をチャリティーの寄付金に充てることを確認して（5-6 行目）、その場合はイベントが可能だという肯定的な判断をしている（8 行目）。しかしながら、その際「それもひとつ」と述べていることから、あくまでひとつの案であり、全面的には賛成できない様子が窺える。この発話の末尾に弱く「かな」を付与しており、自信がない様子、積極的には同意できない様子が見てとれる。

他にも、肯定的な評価と否定的な評価を並べて述べる際に「かな」を使用して発話も観察された。母語話者は肯定的な評価を行う場合にも「かな」を使用していたが、自信がなく断定的に意見を述べることを避けるために使用している様子が窺える。

以上のように、母語話者は相手の意見に対して反対意見を述べる際や、相手と異なる意見を述べる際に対立を緩和させるため、または積極的には同意を表明したくない際に断定的な発話を避けるために「かな」を使用する様子が観察された。

## 4.2 学習者の「かな」

次に、学習者が使用する「かな」に注目する。まず、一番使用が多かった「具体案の提示」の例を挙げる。

### 会話例4 学習者の「かな」(1)

01	NNS-5: じゃあ、晩ご飯食べられる時間が、あ:::るのに?なんか7時?
02	NS-5: た[ぶん:::
03	NNS-5: [かな:: 7時::, 6時半か::7時
04	(2)
05	NNS-5: 7時だったら::, 8時半
06	NS-5: °ん::°
07	NNS-5: まで(ある )

この会話は、イベントの開始時間について話し合われている。このやりとりの前には大学の授業の終了時間について話されている。授業の終了時間、夕食のための時間を考えると、「7時」という意見を「かな」を末尾に付与して発話している。その後、再度「7時」を述べたり、「6時半」と意見を変えたりしており、判断に迷っている様子が窺える(1・3行目)。このように、学習者も母語話者と同様、断定的な意見述べを避ける場合に「かな」を使用する様子が見られた。

次に、「かな」を用いて否定的評価や肯定的評価を行っていた発話に注目する。

### 会話例5 学習者の「かな」(2)

01	NNS-6: ん-す-,あのキャンパス::に,[あつたら:
02	NS-6: [うん
03	NS-6: うん
04	NNS-6: さんかくひ::を,なんか:,な-か-ないてほうがいいかな::
05	NS-6: (2)あ::あ::あ:: 参加費.(2) どうだろ.(2) けどさ::, 焼いて売る,
06	焼いて売るからさ::, お金もらえるじゃ::ん
07	NNS-6: そう[そうそうそう
08	NS-6: [それプラス参加費っているかな↓::
09	NNS-6: えほんと::?
10	NS-6: °いる?°
11	NNS-6: (2) あは::い::[れ::な::い::気がする::
12	NS-6: [ど::う::だろ::
13	NNS-6: あの:::たぶん, 学生は:::, あの参加費を:, 見ると::,
14	全然興味が[なくなってしまうかな::

---

15	NS-6:	[ん::ん::ん::ん::, なしかな.: いらねえ]
16	NNS-6:	いらねえかな↓::
17	NS-6:	いらねえかな°

---

この会話例では、イベントの参加費の有無について話し合われている。ここまでの話し合いの中で、お菓子を売るというイベントは大学構内で行うことが決まっている。大学でのイベントいうことを踏まえてNNS-6は参加費はない方がいいという具体案を述べている(1・4行目)。その際、「かな」を相手の反応を伺うように付与している。その際、語尾を伸ばしながら発音しており、「ない方がいいのかなあ」というように疑いを持っているようにも読み取れる。NS-6はNNS-6が相手の発話意図が分かりにくかったのか、参加費の有無についてすぐに判断できなかったのか、考え込むような様子を見せ、すぐに意見を述べていない。そして、「お菓子を焼いて売るからお金がもらえる」という理由を述べてから(5-6行目)、「参加費っているかな↓::」と、「かな」の音調を極端に下げ、参加費は不要ではないかという意見を、反論していると読み取れる形式で述べている(8行目)。NS-6はNNS-6は「参加費は必要だ」という立場であると考えているように読み取れる。さらに、それに対してNNS-6は驚いたように「えほんと::?」と述べており、さらに強い反対意見を主張しているように見える。NNS-6は4行目で「参加費はないほうがいい」と述べていたため、両者の意見は一致していると考えられるのだが、NNS-6はNS-6の「参加費っているかな↓::」という発話を「参加費は要る」という意見だと読み違えた可能性が考えられる。NS-6は相手の意見が読み取れなかったのか、小さな声で「いる?」と呟いている(10行目)。NNS-6は参加費を徴収する場合は学生が興味を失うと、参加費を設けることの問題点を挙げて、「参加費はいらねえ」という立場を主張している。これまでのやりとりから、NNS-6はNS-6が「参加費はある」と考えているように読み取れるので、この発話は相手の意見に対して否定的評価をしていると判断できる。発話末尾に「かな」を付与して、否定的意見を和らげようとしている可能性が考えられる。NS-6がその発話に重ねて同意を示し、強く賛成を示すことで、両者の意見が一致したことが表面化された。その後にNNS-6は両者の意見を確認するためか、「いらねえかな」と述べているが、NS-6の8行目の発話のように音調を強く下げ、疑問を呈するようにも読み取れる。NS-6も「いらねえかな°」と発話末尾が消えるような発話から、若干不安に感じている様子も見られる結果となった。

このように、学習者は断定的な発話を避けようとしたのか、時折「かな」を用いて具体案を挙げたり、否定的評価や肯定的評価をしたりしていたが、その発話意図が対話者に伝わらないようなやりとりも見られた。非文法的な発話がコミュニケーションを阻害していた可能性もあるが、「かな」を用いた意図が相手に伝わらず、コミュニケーションが円滑に進まなかった可能性もある。

最後にもう一例、肯定的評価をする際の「かな」の例を挙げる。

#### 会話例6 学習者の「かな」(3)

---

01	NNS-1:	なんか今まで考えてるhことh妖怪hウォッチだけどhh
----	--------	----------------------------

---

- 
- 02 NS-1: う[ん  
 03 NNS-1: [や最近 h, すごくはやって[るから妖怪ウォッチのような  
 04 NS-1: [ん?  
 05 NS-1: あ:::  
 06 NNS-1: イベントとかあったら、>なんか<みんなが妖怪ウォッチの  
 07 NS-1: うん[うん  
 08 NNS-1: [ダダダンスとか.  
 09 NS-1: ダンス:?  
 10 NNS-1: したら::  
 11 NS-1: >それ<みんな:知っている.  
 12 NNS-1: う:[::ん  
 13 NS-1: [ダンスで,ん::いいね  
 14 NNS-1: それ楽しいかな:
- 

この会話は、チャリティーイベントでどのような催し物を開催するののかについて、具体的に話し合っているやりとりである。NNS-1は「すごく流行っている」という理由を説明しながら、妖怪ウォッチというアニメのダンスをするのはどうかという意見を挙げている（1・3・6・8行目）。NS-1は、一度その案を上昇調で繰り返して確認をした後（9行目）、「みんな:知っている」と理由を述べてから（11行目）、「いいね」と積極的に賛成をしている様子が窺える（13行目）。NNS-1は自分が挙げた意見を支持する理由を「楽しい」と述べており、その際発話末尾に「かな」を付与している（14行目）。この後も特に問題点などは言及しておらず、すぐにタスクシートにも決定内容として記入をしているため、両者共に「ダンス」という案を積極的に支持している様子が見て取れる。

しかしながら、疑いを示す「かな」を使用することにより、「楽しいのだろうか」という意図があるようにも見え、不自然さが感じられる発話となっている。この場面では、両者が積極的に「ダンス」という意見を支持しているため、「かな」の使用は不自然だと言えるのではないだろうか。

以上のように、学習者も意見を述べる際に「かな」を使用していたが、母語話者とはその使用傾向に相違が見られ、コミュニケーションに問題があるようなやりとりが見られた。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、英語を母語とするアメリカ人日本語学習者の合意形成談話における意見述べ発話の特徴を明らかにするために、「かな」の使用に注目して分析を行った。その結果、「かな」は母語話者と同等程度の産出数が見られた。特に、具体案を挙げる際に使用され、断定を避けようとする際に使用していた可能性がある。その一方で、母語話者が使用した「かな」の意図を読み取れていなかったり、学習者の意図が母語話者に伝わらないように見えたりする箇所や、母語話者とは異なり積極的に同意を示す際にも使用していたりなど、特徴的なやり取りも観察された。

タスク終了後に行ったアンケート調査では、日本人ははっきりと意見を述べない傾向があると考えている学習者も多く、断定的な意見述べを避けるために「か



な」を使用していたと考えられる。日本語母語話者も積極的に使用していたことから、「かな」は学習者にとって聞き慣れていて馴染みがあり、比較的産出も容易な表現であることが窺える。しかしながら、その発話意図が母語話者には読み取りにくく、やりとりに支障が生じているような様子も見られた。「かな」は発話のインネーションによっても相手に与える印象が変わることから、細かな指導が必要であるといえる。

今後の課題として、本研究では分析対象としたデータ数が8組と少な買ったことが挙げられる。特に学習者に関しては8名中2名に「かな」の使用が見られなかったため、結果に個人差が影響している可能性が考えられる。また、本研究では「肯定的評価」「否定的評価」を、直前の発話に対する評価として分類したが、対話者の意見に対する評価なのか、話者自身が提示した意見なのかでも、その特徴が異なると考えられる。より詳細な分析をする必要があるだろう。

### 参考文献

- 安達太郎 (2002) 「質問と疑い」 宮崎和人・足達太郎・野田春美・高梨信及『新日本語文法選書4 モダリティ』174-202, くろしお出版.
- 伊藤亜希 (2017) 「日本語学習者の合意形成談話における「提案-応答」の連鎖の特徴—習熟度の違いに着目して—」『留学生教育』22, 31-40.
- 久米昭元・徳井厚子・徐一平 (2000) 「コミュニケーション様式の日米中比較研究—小集団討論の質的分析を通して—」『先端的言語理論の構築とその多角的な実証』4, 625-670.
- 倉田芳弥・楊虹 (2010) 「討論における日本人学習者と日本語母語話者の不同意表明の仕方：構成要素の観点から」『言語文化と日本語教育』39, お茶の水大学, 158-161.
- 梶本総子 (2004) 「提案に対する反対の伝え方—親しい友人同士の会話データをもとにして—」『日本語学』23(10), 22-33.
- 高宮優実 (2008) 「日本語母語話者のミーティングにおける会話の分析」畑佐由紀子 (編), 『外国語としての日本語教育—多角的視野に基づく試み』(pp.283-302).くろしお出版.
- 平山紫帆 (2015) 「自然会話における終助詞『かな』の用法」『日本語教育実践研究』2, 68-79.
- 堀田智子 (2020) 「中国語を母語とする日本語学習者の不同意行為—ヘッジ使用にみられる中間言語の考察—」『国際文化研究』26, 55-67.
- 堀田智子・吉本啓 (2013) 「中国人日本語学習者の『不同意』行為—構成要素と発話の連鎖の考察—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』8, 39-47.
- 楊虹 (2014) 「話し合いにおける不同意表明発話のモダリティ—日中接触場面と中国語・日本語母語場面の比較から—」『鹿児島県立短期大学研究年報』46, 87-102.
- Watanabe, S. (1993). Cultural differences in framing: American and Japanese group discussion. In D. Tannen (Ed.), Framing in discourse (pp.177-209). NY: Oxford University Press.

## 資料

## トランスクリプトで使用した記号一覧

[	オーバーラップの開始部	<u>文字</u>	下線部が強調されて発話されている
=	発話間に感知可能な間がない	¥文字¥	笑いながら発せられた発話
(数字)	沈黙の長さ	:, ::	直前の音の引き延ばし
(.)	2秒未満の沈黙	文字-	直前の語や発音が中断されている
.	下降調の抑制で発話	°文字°	弱められて発音された発話
?	直前部分が上昇調の抑制で発話	<文字>	前後に比べてゆっくりと発話
,	直前部分が継続を示す抑制で発話	>文字<	前後に比べて早く発話
↓	音調が極端に下がることを示す	(文字)	聞き取りが曖昧で確定できない発話
hh	呼気音。笑いやため息なども示す	.hh	吸気音。笑いや息継ぎなども示す